

歌碑

文化

寺社

南阿蘇って

石橋

いいな

板碑

点在する文化財を訪ねて

(随時掲載)

神体

伝説

歴史

春とはいえ、まだ少し空気が冷えている感じが残る日、河陽地区を歩いてみました。

こんな日には、吉岡噴気孔からの水蒸気がいやがうえにも目に飛び込んできます。

私も気になっていましたので、役場の防災担当者に尋ねてみました。

それによりますと、平成18年10月には気象庁阿蘇山測候所で噴気現象が確認されています。

その後気象台や測候所、警察、消防、県、村などの関係各機関が警戒する中で、噴気孔の位置は徐々に北の方へ移動したそうですが、その間の蒸気の温度は90度近くまで上昇したこともあったそうです。

現在はほとんど落ち着いて

いるそうで、平成19年7月23



人々の願いを救い上げるため何本も手を持つ千手観音(くまモンの高さは約50センチです)

日付けで熊本地方気象台から「防災対応上、特段の支障はないと判断されます」と、検証結果が届いたそうです。

しかし、噴気孔一帯は表面地下の空洞化が進んでおり、安全確認に立ち会った調査官2名が実際に足を踏み込ませたそうで、そんな話を聞いて私なら絶対近づかないですね、絶対に。

遠くからでも確認できる吉岡噴気孔の水蒸気ですが、それを仰ぎ見るところに垂玉寺があります。

ここで、垂玉寺に行く前にちょっとだけ勉強してみましようか。

みなさん勉強は好きですか。私は嫌いな方でして、学生時代は「いろは習字」は『は

の字忘れて〇〇ばかり」といった、勉強そっちのけで野山や川を駆けまわっていたごく普通の男の子でした。

そんな私が、唯一文化財のとりわけ仏像だけに興味があったという特異体質だったというだけでして、もともと浅学非才な凡人ですので誤解されないようお願いします。

さて、四国地方にお遍路さんによる「四国八十八ヶ所霊場めぐり」というのは、あまりにも有名ですね。空海、つまり弘法大師が四国内八十八ヶ所で行ったとされる足跡を訪ねて回り、自分の健康や悲喜ごもごもの願望成就を願って歩くというもので、約1200年もの歴史があるそうです。

ところで、四国八十八ヶ所霊場めぐりの縮小版といえるものが、ここ阿蘇にあることをご存知でしょうか。

その名は「西国阿蘇三十三ヶ所観音霊場めぐり」といいます。こちらは参拝箇所が少なく、三十三ヶ所観音という文字が入っています。

ここからが本格的な勉強になります。嫌がらず、あきらめず、離れずについてきてください。

一般的な仏像は大きく分けて、如来、菩薩、明王、天の四つの部に分かれています。

如来とは、悟りを開いたという意味がある仏陀の別名で、歴史上でも実在したといわれるゴータマ・シッダルタのことです。

そのため苦行を重ね、悟りを開いたときの恰好が如来の形になっており、納依つまり糞掃衣(便所掃除のときに着る衣)1枚を羽織って、頭は髪の毛がつぶ状にねじれた螺髪として表現されています。

前回は前回に紹介した阿弥如来にそれらの特徴が出ていましたね。

そのほかたくさんの特徴がありますが、ここでは省略するとしまして、如来は仏の中でも最上位にあって、釈迦如来、阿弥如来、薬師如来、大日如来などがあります。

次に菩薩の部です。菩薩はゴータマ・シッダルタが王子の時に出家するその姿を表現していると言われていますので、髪は高く結いあげ、きらびやかな宝冠をかぶり、耳飾り、腕輪、瓔珞(胸飾りや腰飾り)などのアクセサリーを全身に付けているのが特徴です。菩薩にはそれぞれ意味があるのですが、それもしづれかの機会に紹介するとしまして、弥勒菩薩、観音菩薩、十一面観音、千手観音、馬頭観音、文殊・普賢菩薩、日光・月光菩薩、地藏菩薩など、なじみのあるものばかりです。

さて、西国阿蘇三十三ヶ所観音霊場めぐりのことは次回で詳しく説明しますが、これから垂玉寺の扉を開きますので、先ほどの菩薩の部の特徴を思い出してください。

開き戸になっている扉をソーツとあけてみますと、やはりいらっしやいましたよ。

先ほどの特徴を兼ね備えた観音様が威風堂々と立っています。

やっぱり「南阿蘇っていいな」。こんな素晴らしい観音様に会えるんですから。

〔記事と写真〕

県文化財保護指導委員

笠野 次雄